陳紹禹(王明)とその魯迅論

川上久寿

中国共産党の最高指導者として毛沢東・瞿秋白の名はあまりに高い，またこのふたりとともに陳紹禹（王明）・李立三の名もきりはなすことはできないだろう。これらの人びとは陳独秀とともに中国共産党五十年の歴史におけるそれぞれの時代のそれぞれの指導者だったからである。これら五人の党の指導者のうち，従来わたくしはとりわけ陳紹禹と李立三には興味をもってきた。というのは，これらふたりが他の三人にくらべて知られることあまりに少なかったからである。毛沢東には中国で最高の紙質，印刷，装幀の堂々たる四巻本の選集の他に並製本もある。それにまた世界を風靡した『毛主席語録』がある。瞿秋白はいまこそ中国でその名声が落されはしたものの，魯迅との関係上その名は不滅であり，『瞿秋白文集』四巻は奨励はされないかもしれないが，魯迅が中国で読まれるかぎりは葬り去られることはあるまい。陳独秀は『胡適文存』があるとすれば同時に『独秀文存』もあるそういう運命にあるひとであり，五・四運動との関係上抹殺し去ることはできない。そういうわけで，毛沢東，瞿秋白，陳独秀，この三人には文集が残され，それはこれまで多くのひとによって読まれ，そして今後もおそらく読まれてゆくだろう。しかし，のこるふたりの陳紹禹と李立三になると事情がすこしちがう。李立三の書いたもので現在われわれの眼にふれるものは何もない，このひとが党の主導権をにぎっていた時代，いわゆる李立三コースを押し進めていた時代には，党関係の出版物にかれの書いたものは氾濫したことであろう。そう推定してもまちがいなかろうと思うが，現在のところそれは中国の何処かでなければ見ることはできないのではないか。中国共産党史上の李立三コースはあまりに有名である反面，かれの書いたものを読むことはわれわれには不可能である。これはわが国においてばかりでなしに，中国で

もそうかもしれない。もうひとりの陳紹禹はどうかというと，このひとは李立三よりは幸運だとみえて，書いたものが日本でも印刷されていて，われわれでもそれを読むことができる。そのなかには日本語では読めないが，魯迅論もある，それは『中国人民の重大な損失』と題するもので，一九三六年十月二十五日にパリで書かれ，そして『救国時報』という新聞にのせられたものである。一九三六年といえば，その年の十月十八日に魯迅が死んだので，その追悼文として書かれたものである。この年の七月七日には日本が宣戦布告なき全面的な戦争に突入した芦溝橋事件がおきている。

ところで本論の目的とするところは，この陳紹禹の魯迅論『中国人民の重大な損失』を紹介することであり，またこの論文につき多少なりと，わたくしの意見を述べることにある，そのばあい中国共産党史のなかの陳紹禹をみることにもなろう。わたくしがこの論文を紹介するということは，これまでわれわれの読んだこともない新資料だということである。わたくしは日本語でも中国語でも従来この論文をみたことがない。ソ連科学アカデミー版『魯迅 1881-1936』一九三八年版によって，はじめてこういう論文のあるを知った次第である。この本の標題の下に『現代中国の大作家を記念するための論文と翻訳集』とあるとおり，魯迅の小説と翻訳（他に雑文一篇）と陳紹禹の本論それにロシヤ人の書いた論文が一篇収められている。したがって多分わが国にはまだ知られていない資料のひとつとして，論文の価値の如何を問わず，紹介される必要はあるにちがいない。現在汲古書院で上梓している『王明選集』にこの論文が収められる予定か否かはいまのところ不明だが，この選集の予告によるとこの論文は収録されていない模様である。

次に『中国人民の重大な損失』をかかげよう。

十月二十日の朝十時，『プラウダ』掲載の上海通信により『中国のゴーリキイ』たる同志魯迅の死を知った。この報道はわたくしを限りない悲しみにおとしいれた。それは魯迅読者の悲しみ，魯迅の戦友のひとりの悲しみだけではない，中国青年にとってとりかえしのつかない悲しみであり，中国人

ひとりひとりの思いとしても克服しえない悲しみである。それゆえ，魯迅の訃報はわれわれ何百万の中国青年を悲歎にくれさせたにちがいない。

先年，中国人民は聶耳をうしなった。聶耳は偉大だった，かれの死がくやまれてならないのは，作曲家としてまだ若く，才能に富み，新らしい時代にそうた大衆的な中国音楽を創造したひとだからである。今や中国人民は魯迅も失うこととなった。魯迅も偉大であり，その死去はわれわれの魂を強くゆさぶり，深い感銘をあたえずにはおかない。なぜなら，かれは『下層社会』の生活を反映する中国文学，大部分の被圧迫中国人の，解放の戦いの武器となるような新時代の中国文学をつくった才能ある革命文学者だったからである。

魯迅が中国の知識人のうちで，また解放運動のなかで，かくもきわだっているのは，かれが絶え間なく時代とともに前進できたからである。まさに『五・四』運動の時代から今日にいたるまで，かれは常に進歩的思想の浪のなかにいることができた。かれは大革命家が本質的にもつすぐれた資質と徹底性を完全に具えていて，北洋軍閥支配の時期から現在にいたるまで反動の力がいかに強大であろうとも，その誘惑に負けもしなければ脅威に屈することもなかった。かれは文学の分野で解放事業に全力をつくしたのみならず，中国人民が自らを解放する偉大なたたかいにも実践面で直接参加した。

魯迅は作家として有能だっただけでなく進歩的な政治家でもあったから，中国の文壇では第一等の地位をしめていた。魯迅は有能な文学者と進歩的政治家の芸術と知恵を一身に具備していたので，大作家の力量をもって辛辣な風刺とともにきびしい峻烈さをもった政論を書くと同時に進歩的政治家の遠見をもって現代の人間悪をあばきだす心にしみとおるような作品を書きえたのである。

魯迅は大革命文学者であり政治家でもあったればこそ，ゴーリキイ，ロマン・ローラン，バルビュスなどあらゆる現代作家とおなじように，つきることなき熱烈な愛情を自国の人民・人類・正義・真理・自由・光明に，さらには階級に，搾取され圧迫されている世界の多くのものに，と同時に全人類

解放の歴史的使命をになった階級つまりプロレタリアートにそそいだのである。魯迅は社会主義ソ連にたいして，また中国人民の解放のため英雄的にたたかっている中国共産党にたいして，あらゆる先進思想と世界の進歩にたいして，衷心燃えるような共感をおぼえていた。魯迅の社会主義ソ連にたいする態度はどうだったかといえば，ロシヤの古い文学遺産と現代のソビエト文学を忠実正確に中国へ紹介したのみならず，ソ連にたいする反動勢力の悪意にみちた中傷とは勇敢にたたかった。中国共産党，中国紅軍，ソビエトと魯迅との関係についていえば，魯迅は筆によって中国共産党，中国紅軍，ソビエトが勝ちとった解放の大事業を精神的に援助し，その作品では何とかして中国共産党，紅軍，ソビエトを圧殺し破壊しようと全力を傾けていた暗黒勢力とたたかったばかりでなく，行動によっても中国共産党の英雄的な革命斗争に力をかした。中国共産党が財政的に極度の困難に陥ったとき，魯迅がその苦しい作家活動でえた原稿料を党に提供したのも一再ならずのことだった。共産党員であるなにがしかの同志が執拗に追跡され，反動のその筋のものによって逮捕の危険にさらされたとき，魯迅はどんな危険もかえりみず，万難を排してこれらの革命斗士を安全にかくまった（たとえば，瞿秋白同志は魯迅のおかげで数ヵ月も上海にかくれていられたのである）。反動勢力がくりかえしくりかえし紅軍とソビエト地区に襲撃を加えたとき，魯迅はいかなるテロにも臆する気色をみせず再三にわたり公然と抗議のこえをあげて憚らなかった。魯迅は中国紅軍の英雄的斗争に限りない共感を表明したが，特に紅軍主力の西遷（つまり長征のこと，川上）の偉業をばこの上なしに讃嘆した。かれは紅軍とソビエト地区の工作に携わる十名からの同志を糾合しては秘密裡に長い談合を交したりした。かれは中国紅軍のたたかいについて作品を書くため非常にたくさん資料をととのえもした，かれの言葉によると，長征という史詩が小説に書かれたならば，それはソ連の有名な『鉄の流れ』よりもっとおもしろいものになっただろうという。しかし残念にもかれは病魔におかされ，ついに死去の日までその心からなる願いを果しえなかったが，それは中国共産党と紅軍にとって損失だったのみならず，魯迅の読者た

るすべての青年にとっても損失となった。昨年あらたに中国共産党が救国抗日統一戦線の結成という新戦術を宣言したとき，魯迅はそれを熱心に支持し，文化界における抗日民族統一戦線の組織に参加したりした。魯迅の全世界の人類解放にかんする態度についていえば，かれは帝国主義と帝国主義戦争に断乎として反対し，自由と平和擁護のため忠実真摯にたたかい，現在スペインで行なわれている人民の英雄的な斗争の燃えるような支援者だった。魯迅は進歩と真理を敵視する反動の暗黒勢力にたいし深い憎しみをはぐくんだ人だけあって，崩潰した清朝のみならず北洋軍閥をも憎み，中国併呑を企らむ日本帝国主義の盗賊を憎み，あけすけに祖国を外国に売り渡し自国の人民を打ち殺している民族の裏切り者を憎み，中国を破滅においやる対外無抵抗政策と国内における大衆の殺戮を憎み，『現在の中国人なら誰でも必要な人間道徳をかなぐりすててしまい』そして『いま現に侵入して来ている日本軍閥に歓迎されるような』トロツキイ・陳独秀解党派集団を憎んだばかりでなく，また，革命のかけ声でごまかしては反革命活動に狂奔するいわば羊頭をかかげて狗肉を売る連中を憎んだ。それとともに，かれがとりわけ憎しみを覚えたのは革命家でありながら断乎とした不屈の精神に欠けるもの，脅迫に屈し誘惑に打ち勝てずして投降してしまうものだった。かれは中国人民を畜生のような生活におとしいれているあらゆる罪悪にたいしてはげしい嫌悪と非妥協をしめしたにとどまらず，全世界の反進歩・反社会主義的暗黒勢力，とりわけファシズムを歯ぎしりして憎んだ。

魯迅の愛と憎しみは一個人の愛と憎しみではなく，中国人民とあらゆる進歩的な人びとの思いを代表したものだった。たとえば，侵略者たる日本軍閥にはつよい憎しみを覚えた魯迅も，他面では日本の勤労者を非常に愛していたのである。

『中国のゴーリキイ』は早く死にすぎた。かれは死ぬその日まで思いを口にし，書きたいことを筆に託す自由をもたなかった。かれは自ら話したいことが話しできるし，行動したいことができるであろうそういう国がひとつこの世界にあることをしっていた。しかし健康その他さまざまな理由から死

ぬまでにその国を見に出向いてゆくという願いを果しえなかったのである。かれはまたソビエト政府がゴーリキイに敬意を表わしたのと同じような栄光を利用しうる場所が中国にもあることを知らぬではなかった。しかし暗黒勢力に妨げられて行かれぬものとわかりきっていたので，極度に自由の束縛された環境のうちに死ぬよりほかなかったのである。

『中国のゴーリキイ』はプロレタリアートと全人類の解放という高遠な理想が中国の何百万の人びとの現実の生活に実現されるのを見なかったばかりでなく，家畜のように使役されてきた中国人民と奴隷の運命にあった中国の解放もおのが眼で見とどけることはついになしえなかった。それは亡き魯迅の悲しみ，中国文学界の悲しみだけにとどまらず，われわれ全中国人の悲しみである。

中国人民が死中に活をもとめ毅然として果敢な抗戦をはじめたちょうどその時，魯迅の健康は悪化してこの世を去らねばならなかった。それは建人，景宋とその息子にとっては何にもくらべがたい損失，魯迅が教育し育成した青年たちにとっては限りない悲しみを覚えさせる損失であり，何百万という魯迅の読者の大損失であり，中国の知識人，文芸界，文学愛好青年にとっては取り返えしのつかぬ損失であり，さらには四億五千万中国人ぜんたいの重大な損失でもあった。

魯迅が死ぬとその存命中は思想的・政治的に敵だったものですら魯迅に敬意を表わして記念し，惋惜せずにはおられずにいる。それによって，『死んだ敵の領袖の価値がわかった』時に，利口な敵は習性として昔ながらのきまりきった陰謀をいかに企らむかということ，また魯迅の個人の資質と権威がいかに高かったかということがはっきりするだろう。

最近数日われわれは魯迅の死を悼む数多くの報道を受けている。すなわち，中国の人民大衆，とりわけ文学芸術工作者団体と学生団体において嵐のような高まりのうちに魯迅追悼集会が行なわれたのみならず，世界の主だった国々の文学芸術の活動家の団体，とくにソ連，フランス，アメリカの進歩的文学者によっても追悼されたが，そのいずこにおいても魯迅の死は異常な

激動をあたえずにはおかなかったのである。全世界文化擁護協会はパリから世界の進歩的作家の名による追悼電信を発したが，これは偉大な戦友を記念し，尊敬の念を表わしたものとして，世界文学では初めてのことである。中国共産党中央委員会と中国ソビエト政府は魯迅の死去にかんして全中国人民に特別な声明を出し，中国共産党，ソビエト政府および中国紅軍司令部は追悼会を準備して，魯迅を永遠に記念するため解放区に記念碑をたてようとしている。それはつまり魯迅とその事業が永遠に不滅なことを意味する。

魯迅は死んだ。貴重な文学遺産は魯迅によってのこされ，中国人民の解放という未完の事業は魯迅の遺嘱としてのこされている。労働者の解放のためたたかう文学芸術工作者，知識人，青年，めざめた労働者・兵士・中国の民族と国家に関心あるすべての人びと，それらの人はしかと次のことを知らねばならない。魯迅を記念し魯迅に敬意を表わすよい方法は，とりもなおさず魯迅の思想をひろめることであり，魯迅の人格を模倣することであり，魯迅が生涯をかけてたたかいとろうとした事業，つまり中国人民の民族解放事業と全人類の解放事業をなしとげることである。

陳紹禹（王明）

救国時報　1936年10月25日

パリにて

以上が王明の魯迅論，正確にいえば魯迅追悼文である。王明というひとは現在の中国ではニセマルクス主義者の政治カタリの裏切り者と罵られているぐらいだから，むろん，この文章が中国で何かに掲載されて陽のめを見るということはありえない。そういう点では容易にお目にかかれない珍らしい文献とはいえようが，内容になると注目に値する魯迅論ではない。瞿秋白，毛沢東の魯迅論のそれぞれに個性的で深刻な思想性をもちながら文学的であるのにたいして見劣りすること甚だしい。しかし，おもしろいのは，毛沢東が一九三五年の遵義会議で党の指導権を握る以前の中国共産党のコミンテルンへの盲従・国民党と統一戦線をむすんだ後の中共の右翼傾斜・教条主義な

ど王明路線がよくあらわれており，その他いろいろと魯迅研究上にも示唆をあたえてくれることだ。王明は一時は中国のスターリンといわれた李立三を権力の座から引きずり下ろしてとって代ったひとだから傑物ではあろうが，魯迅論となると，瞿秋白，毛沢東より数段見劣りするのはどうしてか。それはひとつには中国の伝統的ともいってよいかもしれない政治家，すぐれた政治家のもつ文人的資質の欠除ということによるのではあるまいか。瞿秋白，毛沢東はマルクス・レーニン主義の思想をもった革命家ではあるが，それと同時に詩人でもある。ところが陳紹禹はそうでない，と断定はしかねるがそうでないように思われる。少なくとも『中国人民の重大な損失』を読んだかぎりではそうである。この論文，いや追悼文のつまらなさは，声を大いにして魯迅の死を悲しみ，魯迅の死を大いなる損失とくりかえし歎くだけであって内容にとぼしいということである。いったいほんとうに魯迅の死を悲しんでいるのか，という疑問さえわいてくるほどだ。それほどまでにこのひとの書いたものは魯迅に密着していない。それが何よりの欠陥で読むものに訴えるものがないわけである。それにいまからみると古臭い当時流行のステレオタイプの左翼用語にみちているということも現在のわれわれにとって白々しさを感じさせるのかもしれない。たとえば，『人民解放の戦いの武器』とかいうのはいいとして，『人民解放のため英雄的にたたかっている中国共産党』とか，『中国共産党の英雄的な革命斗争』とかいって頻りに英雄的が出てくるが，このことばは当時のマルクス主義者の常用語で，とりわけはね上りの冒険主義をとっていた時代には愛用されたことばらしい。しかしどこかの国などではこういうことばは『革命』『暴力』『独裁』などとともに平和でおとなしい国民にアッピールしないからということで，いっさい使用禁止か或いは禁止になるだろうという共産党もある。そういう国では陳紹禹の書いたものなぞ魅力がないにきまっていよう。だが，それにもましていやらしいのは，『中国のゴーリキイ』ということばが始めから終りまで何回も出てくることである。魯迅が『中国のゴーリキイ』であるならば，ゴーリキイは『ロシヤの魯迅』なのかといいたくなる。しかし『中国のゴーリキイ』は聞いた

ことがあるが，『ロシヤの魯迅』とは聞いたことがない。『中国のゴーリキイ』ということばは当時（1930年代）ソ連の誰かが言ったのか，それとも中国人が自らそういったのか，その点は詳かでない。しかし，いずれにせよ，国際共産主義運動においてコミンテルンが厳然として最高の権威をもって全世界各国の支部に君臨していた時代に生れたことばであることは確かである。このことばがソ連の或る人によっていわれたとすれば，当然のことかもしれない，それは権威者のことばだからである。だが，中国人自身によることばだとすれば，それは中国人が自らを軽視し権威の前に屈服し跪拜したとしか思われない。なぜなら，魯迅というひとは魯迅以上でもなければ魯迅以下でもないからだ。その点では故内山完造氏の魯迅評価は立派なものである。『吾々日本人はもっともっと人間魯迅を見なくてはならんと思う。一文学者魯迅であるなら，世界に魯迅は未だ外にもあると思う。文学者魯迅はゴーゴリの影響を受け，漱石の影響さえも受けて居ったであろう。中国のゴールキーでよかったかも知らんが，しかし魯迅は自らも云うて居ったように，「自分は中国のゴールキーと云われることを心よしとしないものである。ゴールキーはソ聯のゴールキーが本物である。中国のと云われた時には本物には及ばないと云うことが裏にある。自分は中国のゴールキーではない。自分は飽くまで中国人魯迅である」と。私はこの言葉を思い出す毎にいつも溜飲を下げるのである。中国人魯迅の前途には無限大があったのである。人はよろしく生きている間はこの意気なかるべからずと思う。魯迅生前のこの意気，実に一文学者ならんや，一創作者ならんやである。宜なる哉，全中国の青年男女が泣いたのは文学者魯迅に泣いたのではない。人間魯迅の死を泣いたのである。毛沢東共産党主席が「孔子は昔の聖人であり，魯迅は現代の聖人である」と叫んだ一語は吾等の味うべき言葉であると思う。』（花甲録，内山完造著，岩波書店刊，208頁）（傍点は川上）内山完造氏が魯迅の言葉に溜飲を下げたといわれるならば，わたくしは内山完造氏の言葉にも快哉を叫ばずにはおられない。内山氏のこれらの言葉は実に立派な魯迅論であって，これだけのことをいえる人はめったにいるものではない，この前ではわたく

しも含め魯迅を口にする多くの人の議論は色を失う。中国人では瞿秋白，日本人では増田渉先生とともに親しく魯迅とつきあって他の何人も見ることのできない魯迅の真髄を見てとっていたひとというだけではない，内山完造という迫力ある人間そのものから出ることばであって，内山氏でなければいえない言葉である。これにくらべると陳紹禹などは魯迅について何もいっていないにひとしく，『中国のゴーリキイ』を濫発しているところなど正に滑稽というよりほかない。『中国のゴーリキイ』ということばは自己の権勢欲のためにソ連の大国主義，コミンテルンの権威に迎合し屈服した奴隷のことばにしかすぎないようにみえる。『中国のゴーリキイ』という言葉を中国人が発明したとすれば陳紹禹か蕭三あたりではあるまいかとわたくしは思っている。陳紹禹はコミンテルンをバックに瞿秋白，李立三らのライバルを指導的地位から引きずりおろして自らその地位についたひとであり，コミンテルン代表のミフに引き廻わされていたぐらいだからコミンテルンには平身低頭していたこと，あたかも現在の日本共産党の指導者がかつてコミンテルンやコミンフォルムにたいして従順なること羊の如くであったと同然だったらしい。最近『人民日報』,『紅旗』,『解放軍報』編集部が発表した『中国共産党の五十周年を記念する』という論文によると，陳紹禹（王明）は次のように批判されている。その評価ぶりを見てみよう。

『わが党が国民党と分裂し，陳独秀の右翼日和見主義路線を是正したあと，すぐにまた，1927年末から1928年はじめにかけての瞿秋白の「左」翼盲動主義路線，1930年6月から9月にかけての李立三の「左」翼日和見主義路線，1931年から1934年にかけての王明の「左」翼日和見主義路線があらわれた。この時期には，陳独秀の解党主義，羅章竜の右翼分裂主義，およびその他革命に悲観失望する右の偏向があらわれたとはいえ，主としてこの三回の「左」翼日和見主義路線，とりわけ，四年の長きにわたって党内を支配した王明の「左」翼日和見主義路線の危害はきわめて大きく，その教訓もきわめて深刻なものであった。』（北京周報，1971年27，8頁）このように瞿秋白，李立三よりも王明の党にあたえた危害の大なことを強調している。

『一九三一年一月，王明は党の六期四中総で，党中央の指導権をかすめとった。王明はみずから「百パーセントのボリシェビキ」をもって任じ，「李立三路線反対」の旗じるしをかかげながらも，中央は「李立三路線の一貫した右翼日和見主義の理論と実際にたいして少しも摘発せず，打撃もくわえていない」などといい，「党内の当面のおもな危険は依然として右の偏向である」とし，実際には李立三路線よりもさらに「左」の日和見主義路線をおしすすめた。王明は，ほかの「左」翼日和見主義者とおなじように，中国革命の理論と実践がまったくわかっていなかった。かれらは，民主主義革命と社会主義革命の限界を混同していた。かれらは，労働者をしらず，農民をしらず，戦争をしらず，中国革命の不均衡性，曲折性，長期性をしらなかった。かれらは，中国の階級関係についてまったく調査もしなければ，研究もせず，中間派は「いちばん危険な敵である」などと鼓吹し，ブルジョア階級と上層小ブルジョア階級にはすべて反対することを主張した。かれらは，多くの「左」の政策を実行し，「すべてのものと闘争し，連合を否定した」。軍事路線では，まず冒険主義をおしすすめ，のちに体当り主義と逃走主義に転じた。組織路線では，セクト主義を実行し，毛主席の職権を奪った。かれらのあやまった路線に賛成しない者にたいしては「無慈悲な闘争，容赦のない打撃」をくわえた。王明は法皇のように自分を党と人民の上におき，いたるところでそのあやまった路線をおしすすめた。その結果，わが党の勢力は，赤色区では九〇パーセントをうしない，白色区ではほとんど百パーセントをうしなって，赤軍は移動をよぎなくされ，長征をおこなった。……

抗日戦争の初期，裏切り者王明は，極「左」から極右にとびうつった。王明は抗日民族統一戦線の結成を口実に，共産党を信用する以上に国民党を信用し，共産党の独立自主の原則を完全に解消し，いわゆる「すべては統一戦線を通じて」，「すべては統一戦線に従う」ということを提起した。これは実質的には，すべては国民党を通じ，すべては国民党に従い，国民党の反動政策とあくまで闘う勇気がなく，思いきって大衆を立ちあがらせる勇気がなく，思いきって革命の軍隊を発展させる勇気がなく，日本侵略軍の占領地区

内で抗日根拠地を拡大する勇気がなく，抗日戦争の指導権を国民党に進呈してしまうものである。このように，王明はまたも一九二七年当時の陳独秀の「すべてのものと連合し，闘争を否定する」というあやまった路線に逆もどりした。』(北京周報　1971年27，8-9頁)(紅旗，1971年，7-8，9-10頁)

中国における最も新らしい王明評価は以上のようなものである。これは二十年前に出た胡喬木の『中国共産党の三十年』とほぼ内容はおなじで，ただその当時はまだ毛沢東と劉少奇の間が分裂していなかったか或いは両者間に斗争が行なわれていてもそれが表面化していなかった時代なので，王明が劉少奇の正しい政策に反対したことなども書いてあったが，それが削られている程度，それに多少の字句，表現の差があるぐらいのもので基本的には変りない。これらの党史は毛沢東路線の正しさと王明が党に甚大な危害をおよぼしたあやまった路線を明らかにしたもので，また，王明というひとがいかに権勢欲がつよく，その敵対者には無慈悲で容赦のない打撃をあたえたかということ，権力の座にあるときは法皇のようにふるまうが，いったん強大な敵に出あうといかにもろく崩れ去るかということ，つまり魯迅のいう「権力者の反面は奴隷である」ということばを思い出させる。現在ではこのように批判されている陳紹禹も党中央の指導者におさまっていた時にはどう評価されていたか。非常に鮮やかな対比の妙を見せてくれるので，当時コミンテルン代表として上海に派遣されていたミフのことばをかかげよう。

『上海の党組織は，陳紹禹(王明)同志の領導下に，まず第一に半トロツキストの李立三路線に対する反抗闘争を開始した。これは正確なる路線のために行なった闘争であって，完全なる勝利を獲得したのである。陳紹禹同志——中国共産主義運動におけるもっとも権威と信望のある，また，天才的な領袖の一人——の周囲に，党のもっとも優秀なる幹部を団結し，かれは党内のその他の優秀なる領導者——秦邦憲，王稼祥，何子述(一九三三年，北平陸軍獄舎にて病死)，沈沢民(つもる苦労で病気となり，鄂豫皖ソビエト区で死亡)，陳原道(一九三二年，国民党によって銃殺された)——などの同志と協同して二つの戦線における闘争上，正確なるレーニン・スターリンの中

国革命問題に関する路線を堅持した。しかし，三中全会（一九三〇年九月）は調和派的な立場をとった結果，党はその当時なおまだ正確なるコースに進むことができなかった。しかし，間もなく開かれた四中全会（一九三一年一月）において，党中央の政治路線は糾正されたのである。

なお，この四中全会に対して李立三はその誤りを承認する声明書をよせ，瞿秋白も公開の席上で自からその誤りを承認したのであった。……』（『中国共産党史』上巻，大久保泰著，原書房，1971年，三二二頁）

コミンテルンのご威光を背後にもつともたぬのとではこれほどの差が出てくる。ちなみに記しておくが中華人民共和国が成立した一九四九年以後にソ連で出版された『ソビエト大百科辞典』にはむろん毛沢東，劉少奇の名は出ているが，そして陳独秀も見あたるが，李立三と陳紹禹（王明）の名をさがし出すことはできない。権力の所在の転変につれて人間の評価というものにはこれほどの変りようがある。一九二七年末から一九二八年はじめまでの瞿秋白の左翼盲動主義といわれた時代，一九三〇年六月から一九三一年一月までの李立三コースが完全に終焉をつげるまではほぼ以上のような党内闘争がくりひろげられた。そのくわしい事情はわからないが，よほど激しい論争と陰謀が行なわれたのではなかろうか。そういうことで瞿秋白と王明はライバル同士ということになる。他方魯迅と瞿秋白は親密な関係にあって，魯迅は国民党の特務から瞿秋白をかくまったばかりでなく，かれの著作を編集して出版もしているほどである。むろん王明は魯迅が瞿秋白をかくまったことはしっていた。そういう点を考えただけでも瞿秋白と王明とでは魯迅を見る眼がちがう。だから，『瞿秋白同志は魯迅のお蔭で数カ月も上海にかくれおおせたのである』という王明のことばは微妙である。瞿秋白は一九三四年に開始された長征には病身のため加わらず，その後一九三五年国民党の保安軍団に逮捕され六月に死刑にされた。当時モスクワかパリにいた王明はそれを知ったかどうか，またその年の十月に魯迅が瞿秋白の著作を『海上述林』上巻として編集し，翌一九三六年の四月に下巻を編集し，十月に『海上述林』上巻を出版したことはしらなかったかもしれない。一九三五年の遵義会議で

失脚したとはいえ，一九三六年でもなお陳紹禹の輝かしい指導者としての余光は少なくともソ連では残っていたであろう。そういう時にかれの魯迅追悼文は書かれたのであり，それだからこそかれの大して内容もない魯迅論が一九三八年にソ連で出版の魯迅選集にものせられたのであろう。

王明の魯迅をみる眼の誤りは次のことばにもあらわれている。『「中国のゴーリキイ」は早く死にすぎた。かれは最期の日までその思いを口にし，書きたいことを筆に託す自由をもたなかった。かれは自ら話しまた行動したいことができるであろうような国がひとつこの世界にあることを知っていた。しかし健康その他さまざまな理由から死ぬまでにその国を見に出向いてゆくという願いを果しえなかったのである。』自由に話し行動しうる国が世界にはひとつあるということにも問題はあるが，その点は不問に付してもよい。わたくしなどから見れば事実とは思われないが，当時の共産主義者としては——それはもはや信仰みたいなもので——やむをえなかっただろうから。それよりもわたくしは魯迅が健康その他さまざまな理由からソ連へ行けなかったということにひっかかる。王明は魯迅がソ連へゆけなかった（或いはゆかなかった）主な理由を健康にもとめているが，それは事実に反するだろう。許広平の『魯迅追憶録』（『魯迅回忆录』許广平，作家出版社，1961年，北京）によると，一九三二年には魯迅も許広平もソ連へゆく気になっていたことがわかる。許広平は陸万美の『魯迅先生の「北平五講」前後の追記』（『追記魯迅先生“北平五講”前后』，『憶魯迅』，95頁，人民文学出版社，1956年，北京）を引用して書いている。しかし引用文と原文とでは少し出入があるので，ここでは陸万美の原文を引こう（翻訳は川上）。

『ずっと後になって，党内の責任ある同志が話してくれた真相というのはこうだ，主としてソ連のゴーリキイの招待をうけたので，魯迅がモスクワへ赴いて，ちょうど開催準備をしていたソ連作家代表大会（当時，ロマン・ローラン，バルビュス，ショウ等も招待されていた）に参加してもらい，またわりに長くソ連に滞在することによって，静養と同時に，また物も書いてもらおうとしたのである。それはじっさい，全ソ連共産党とソ連人民を代表

して先生にたいし熱烈な真心と限りない敬意をあらわしたものである。当時，中国共産党の責任ある同志も魯迅先生が社会主義ソ連を訪問し，世界の労働者が自らはじめてつくりだした美しくよい生活と新らしい制度を更に具体的に深く理解することには非常に賛成したのだった。したがって，党はきわめて慎重に先生の出国計画を練り，具体的な手はずをととのえた，つまり，まず北京へゆき，それから何とかして日本へ渡り，ついでウラジオストーク，そしてモスクワへという計画だった。この計画はとても重要で，魯迅先生の健康と後期の創作活動にきっと重大な影響をうみだすにちがいないと予想されるものだった。しかし国民党反動派のファショと先生にたいするきびしい監視のためついに実現しなかったのである。』こうして魯迅は十五日間北京に滞在して上海にもどったという。一九三二年十一月十三日から十一月二十八日までである。そのころは満州事変で日本軍が満州（東北）を全部占領し，国民党の蔣介石は外敵を追いはらう前に国内を安んじねばならぬとして愛国運動に大弾圧の鉄槌を下していたので，北京の魯迅は殺されるという噂もとび，魯迅の講演をきいた青年何名かは逮捕されたりしたほどである。魯迅がソ連ゆきを断念しなければならなかった事情として，許広平の書くところは次のとおりである。『同年（一九三二年）の十二月十二日，魯迅は百方手をつくし，内外の困難を突破してもソ連に往くということができなくなってから，曹靖華同志にあてた手紙の中でしごく婉曲に如何ともしがたいといった気持ちで自分のどうにもやむをえない心情を吐露している。『私の旅行はもう時機を失してしまい，事実上でも不可能です。むろんやめるよりほかありません。』（『魯迅全集，第10巻，67頁，人民文学出版社）これでみると，魯迅のソ連ゆきを妨げたものは健康ではなくて国民党のファショということになろう。そこで疑問がおきる。魯迅がソ連へゆこうとしていたこの時は一九三二年のことであって，その時党中央は上海にあり，党の最高の実力者権威者つまり実権者はとりもなおさず王明その人だった，それにもかかわらず王明が国民党反動派の妨害にあって魯迅がソ連へゆけなかったことを知らぬはずがあるまいということである。陸万美のいう責任ある立場か地

位にある同志（負責同志）とはいったい誰なのか，少なくとも王明ではない，とすれば王明以外の中央委員かそれに近い地位或いはもっと下部の誰かであったということかもしれないが，そのひとは明らかでない。むろん，陸万美は知っているはずだが，それを明るみに出してくれていないのは残念である。その責任あるひとは党最高の指導者たる王明に魯迅のソ連ゆきについては何の相談も報告もしなかったことになる。どうもその辺がおかしい。世界的に名声の高い大物魯迅をソ連へ派遣（？）しようという党がある，それなのに党の最高指導者がそれを知らないのである。これは推測というか臆測にしかすぎないが，或いは党内に意見の対立，分岐があって，さらにはもっと激しい権力闘争があって，そういうことになったのかもしれないし，それとも王明は実権者として当然事情をそれと知りながら知らない素振りをしたのかもしれない。それでなければ陸万美の文章はウソを書いたことになろう。しかし陸万美というひとの書いたこの魯迅追憶記を読んで，わたくしはその中につくりごとを感じない。くさいのは王明だという気がする。王明はどうして魯迅のソ連ゆきが実現されなかった主な理由を健康に帰しているのか。それにはわたくしが前に書いた王明の魯迅を見る眼の誤りというよりは，どうも作為造作がありそうである。王明の魯迅論を注意して読んでみると，北洋軍閥，トロツキスト・陳独秀の解党派集団，日本帝国主義，日本軍閥，革命のかけごえで反革命運動に狂奔する連中（調和派といわれる羅章龍にひきいられる反主流を指すものであろう）などがはげしく攻撃されているが，国民党反動派とか蔣介石とかは名指しで攻撃していない。ただ反動派或いは暗黒勢力とぼかしているだけである。少なくともそれは，王明が抗日民族統一戦線を破壊しないために国民党側を刺激しないように気兼ねしたものであろう。先に引用した『中国共産党の五十周年を記念する』における王明批判が全く正しいのかどうか，いまのわたくしには早急な判断は下しかねるが，ほぼそのとおりかそれに近いものではあるだろう。そういうことで，王明は『国民党反動派に妨げられて』という表現を故意にさけて，『健康その他さまざまな理由』という言葉をえらんだものと思われる。こう考えてくる

と，王明は魯迅が国民党反動派の妨害にあってソ連へゆけなかったことを知っていた，そしてわざととぼけたものらしい。そうなると『中国共産党の五十周年を記念する』の批判，王明が抗日戦争の初期，つまり抗日民族統一戦線が結成されたのちに，極「左」から極右にとびうつった裏切り者ということばが生きてきて，ことによると王明自身が魯迅の訪ソ計画を国民党側に知らせて計画の実行を失敗におわらせたのではあるまいか，とも邪推したくなる。そういうことは充分にありうることであり，またその可能性のほうがつよいかもしれない。これまでわたくしにとって，魯迅の訪ソ計画というものは謎だった。それがこの十数年来の若干の資料によって解明されてきている。王明の魯迅論もその意味では大いに価値ある文献といってよい。

一九七一年七月